

「頭がいい」と「賢い」の違い

仮谷 浩隆*

抄録 日常生活において、どちらの単語も聞くが違いははっきり分からないといった類義語はいくつか存在する。その中でも本稿では私たち学生にも馴染み深い「頭がいい」と「賢い」について取り上げ、両者を比較しながらその違いを探る。

キーワード 言葉の違い, 互換性, 対象

1. はじめに

日本語における類似表現に「頭がいい」と「賢い」がある。両者はいずれも同じ場面で使用することができる。例えば、「あいつは頭がいい。」を「あいつは賢い。」と置き換えても意味が大きく異なることはない。

一方、「頭がいい」「賢い」の両者は日常的に耳にする言葉であるが、これらの違いは先行研究においても明確に説明されていない。

そこで、本稿ではこの2つの表現の違いを明らかにすることを目的とする。まずは、辞書記述、先行研究を確認し、その後、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を用いて調査を行う。

2. 辞書記述の比較

まずは、調査の手始めに「頭がいい」と「賢い」それぞれの辞書記述について見比べてみることにする。

そもそも「頭がいい」は「頭+が+いい」という語を組み合わせた表現である。辞書記述を調べる際には格助詞「が」を除く「頭」と「いい」の辞書記述をそれぞれ調べ、関連があると思われる記述を取り出す必要がある。

このことをふまえ、日本国語大辞典を用いて辞書記述を調べると、「頭」には①脳、脳の働き②頭脳、ものの考え方という意味、「いい」には性質、状態、機能、様子などが比較的、相対的に優れて好ましいという意味がそれぞれあることがわかった。これらを簡単に組み合わせ「頭がいい」の意味とするならば、頭脳やものの考え方が優れていることとなる。

一方、「賢い」についても同様に日本国語大辞典を用いて調べると、①才能、知能、思慮、分別などの点で優

れている②ものの品質・性能が優れているという意味があることがわかった。

日常生活においてテストの点数がいい、勉強ができるなどの条件下で使われがちな両者だが、これは知力的な意味で頭脳や知能が優れているということである。すなわちよく使われがちな状況下での「頭がいい」「賢い」に明確な違いはなく、どちらを使っても変わりがないと言える。

ただし両者の辞書記述を見比べたとき、「賢い」に関しては知能や思慮といった、知能やものの考え方に類似する事柄とは別に、才能やものの品質など、広い範囲で優れているという意味を表すということは、違いの1つとして留意しておくことにする。

3. 先行研究

先行研究において、「頭がいい」「賢い」の違いを明確に述べたものは管見の限り見当たらなかった。そこで、類義語の違いを取り上げた川崎（2011）を参照する。川崎（2011）では類義語である「永遠」と「永久」を比較する。

この研究では両者を比較するにあたって、言語資料をデータベース化したものであるコーパスを利用して前後の語例を収集し、その語彙をジャンルごとに分類するという手法を用いており、最終的には「永遠」と「永久」がそれぞれ結び付きやすい語彙のジャンルを比較し、両者に込められたイメージに違いがあると結論付けている。

類義語である2つの言葉を比較するという点で本調査とこの研究は類似する部分があるため、本調査においてもコーパスを利用して前後の語例、並びに用いられている文を収集し、実際に結び付いていたり、かけられていたりする語彙、つまり対象をジャンルごとに分類して比較することとした。

*教育学部教育学科学校教育専攻鈴木ゼミ所属

また、水上（2014）は、『実践日本語教育スタンダード』で定められた話題ごとに作成した形容詞の類義語リストにおいて、形容詞「賢い」を〈性格〉と〈動物〉の項に分類している。

これを参考に「頭がいい」は知能やものの考え方の評価を表す言葉であるのに対し、「賢い」はそもそも性格、或いは性質を表す言葉であるため、辞書記述と合わせて「賢い」の方がやや汎用的な言葉なのではないかという仮説を立てて調査にあたった。

4. 調査方法

前節では、参考にした先行研究について述べた。本節では、調査方法を述べる。

まずは「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を用い、「キー」の「書字形出現形」を「語彙素」、「賢い」と「頭がいい」についてそれぞれ検索し、前後の語例や文を収集する。またこの際、「頭がいい」はキーを「頭」に設定し、後方共起に「が」「いい」を設定して検索した。

こうして入手した文について2つの調査を行う。

1つ目は「頭がいい」を検索して得られた文、また「賢い」を検索して得られた文について、それぞれ用いられている「頭がいい」と「賢い」をもう片方と置き換えることができるかどうかを調べる。

意味や使い方が近ければ互いに置き換えることが可能であると考えられるが、どんな文、どんな使い方なら置き換えられて、どういった場合に置き換えることができるのか、つまり「頭がいい」と「賢い」の互換性について調査することで、置き換えることのできない場合を探し、それを違いとするという手法である。

例として①「東大生は頭がいい」②「あの人は賢い」という「頭がいい」と「賢い」を使った2つの例文があるとする。これらには①に「頭がいい」、②に「賢い」がそれぞれ使われているのだが、これらを入れ替えて2つの文にそれぞれ当てはめてみて①'「東大生は賢い」②'「あの人は頭がいい」と置き換えてみても特に違和感なく文の意味が理解できる。

この作業を通し、どこまで置き換え可能か、互換性があるかを調査し、そこから漏れ出た部分を違いとして調べたのがこの調査である。

2つ目は収集した文において、それぞれ「頭がいい」「賢い」の対象となっている語彙を3つのジャンルに分類する。

例えば、①「彼は頭がいい」②「賢い犬だ」③「物事の賢い進め方」という文があったとする。それぞれ「頭

がいい」もしくは「賢い」がかかっている語彙、つまり対象となるものが文中にある。今回でいえば①「彼」②「犬」③「進め方」がこれにあたる。

今回はコーパスによって収集した文の中の対象となる語彙を①人②動物③その他^{注1)}④分類不可^{注2)}という4つのジャンルに分類し、それを比較した。

これは前項で述べたように先行研究を参考にした手法で、それぞれが使用対象としやすいジャンルを調査し、それを比較することで両者の違いを探ろうとするものである。

以上、2つの手法を用いて行った調査の結果を以下に述べる。

5. 調査結果—互換性について—

まずは「頭がいい」についての調査結果を見る。

コーパスによって収集した「頭がいい」を用いた用例は合計313個で、以下は用例の一部である。

- (1) 彼は頭が良く、しかも強壮な男だ。
（『大日本帝国スーパーマン』、北杜夫（著）、新潮社、1987）
- (2) 狼はとても頭がいいから気をつけないといけない。
（『ワイルド・スワン』、エン・チアン（著）；土屋京子（訳）、講談社、1993）
- (3) 日独はどちらも教育水準が高く、頭がよく、競争心強く、働くことに生き甲斐を感じている。
（『歴史探偵昭和史をゆく』、半藤一利（著）、PHP研究所、1992）

収集した用例の内、「賢い」に置き換え可能だったものが290例（93%）、不可能だったものが22例（7%）、例外^{注3)}が1例（0%）という結果となった。「頭がいい」を用いた例文の9割強が「賢い」で置き換えることができるという事が分かる。

残り1割弱の置き換え不可能だったものは、以下の用例のように大きく2種類に分けられる。

- (4) …頭がいいのか、悪いのか判らぬ愛弟子に、役人として守るべき仁を説いておられるのです。（『孔子』、井上靖（著）、新潮社、1989）
- (5) 「賢い」と「頭がいい」はどこが違いますか？（Yahoo! 知恵袋、2012.3/22）

置き換えが不可能だった例の1つ目の種類は（4）のように、「頭がいい」と「頭が悪い」を並列的に扱って

いる文。対義語の両者を対応させることに意味のある文において前者だけを「賢い」に置き換えることはできない。

2つ目は「頭がいい」と「賢い」を並列的に扱っている文で、(5) や、本稿のタイトルである「頭がいい」と「賢い」の違いのように、類義語である「頭がいい」と「賢い」を並列的に扱っている場合である。これは両者を並列的に扱うからこそ意味のある文であり、それこそ前項までの内容における「頭がいい」という言葉を「賢い」に置き換えてしまえば「賢い」と「賢い」を比較する文になってしまうため、これも同じく置き換えることはできない。

従って不可に分類しているものはあったものの、それらですら文構造が理由であり、単体として用いる「頭がいい」を置き換えられない直接的な理由ではない。つまり、実質的に単体として用いられる「頭がいい」には全て「賢い」との互換性があると言える。

対する「賢い」の調査結果は「頭がいい」のものとはかなり異なっていた。

「賢い」の用例は全部で499例見られた。以下は用例の一部である。

(6) ひとりとして、うまくできなかったことを、この賢い若者がやってのけたんですから。

(『世界の民話』、小沢俊夫(編)、ぎょうせい、1986)

(7) スコットランド原産の賢い犬だ。

(『不条理な殺人』、加納朋子(著)、祥伝社、1998)

(8) 物事の有効的で賢い進め方を知らないことも残念に思う。

(『私の本棚』、松本侑子(著)、講談社、1993)

「賢い」の検索から得られたデータの内、「頭がいい」に置き換え可能だったものが327例(66%)、不可能だったものが142例(28%)、例外^{注4)}が30例(6%)という結果であった。

まず「頭がいい」の調査結果に比べて大きく異なるのは置き換え可能なものの割合で、3割ほど減少しており、その分置き換え不可能なものの割合が4倍に増加している。

また、こちらの置き換え不可能なものについても、「頭がいい」の調査結果とは異なる理由で分類されたものがある。

もちろん先述のように「頭がいい」と「賢い」を並列的に扱っているものも含まれているのだが、方法や行動、選択などが対象となっているものが主に分類されて

いる。これらが対象となる文において「頭がいい」に置き換えようとする違和感が生じるためである。

例えば(8)における「賢い」を置き換えて「頭がいい進め方」とした場合、違和感が生じる。また助詞を少し変えて「頭のいい進め方」とすることもできるが、(8)に比べるとやはり取りまが悪い。

このように「賢い」から「頭がいい」へは置き換えることで違和感の発生するものがある。すなわち互換性という観点から見たとき、「頭がいい」に比べて「賢い」の方が使い方の範囲が広く汎用的な言葉であると言えることが調査結果から分かった。

6. 調査結果—対象について

先に結果からいえば、ここでも前項と同じく「頭がいい」と比較して「賢い」の方が汎用的な言葉であると言える調査結果が得られた。

以下、細かい数字と共に調査結果を追っていく。

まずは「頭がいい」についての調査結果をみる。コーパスによって収集した「頭がいい」を用いた313の例文の内、①人が277例(88%)②動物22例(7%)③その他4例(1%)④分類不可10例(3%)という結果となっている。約9割は人を対象として使われており、「頭がいい」という言葉のほとんどは人に対して使われていることが分かる。次点は動物であるがその割合は1割にも満たない上、その他に至っては僅か1%である。従って「頭がいい」は圧倒的に人を対象として使われることが多い言葉であることが分かる。

続いて「賢い」についての調査結果を見ていく。

コーパスによって収集した「賢い」を用いた499の例文の内、①人が314例(63%)②動物54例(11%)③その他101例(20%)④分類不可30例(6%)という結果が得られた。こちらも同じく人を対象とすることが多いものの、その割合は3割ほど減少している。しかし「頭がいい」についての調査結果と比較して最も大きく異なる点は次点のその他を対象とするものの割合で、「頭がいい」に比べて実に20倍、全体の2割を占めている。

この結果から見ても、人を対象とすることに特化している「頭がいい」に比べて「賢い」の方が動物、その他共に全体に対して占める割合が大きく、やはり汎用的な言葉であると言える。

ここまでで「頭がいい」は人を対象として使われることが極端に多く、動物やその他のものを対象とすることは少数であることがわかった。この理由について検討した仮説を以下に述べる。

まずその他に含まれる、行動や選択について考察する。この行動や選択とは、何者かが行った事実そのもののことだ。この点については、3節で立てた仮説通り、「頭がいい」をもの考え方や知能に対する評価の言葉であるとするなら、対象はそれらを備えたものに限られることが考え得る。すなわち行動や選択自体は単なる事実や選択の結果であって、それ自体には、基本的に知能云々の評価は下しづらい。故に行動や選択を対象とする場合、「賢い選択」などのそれ自体が性質的に優れていることを直接表す「賢い」が用いられることが多いのだろう。

また、その他の中で「頭がいい」を用いているものほとんどは対象が日本やドイツなどであった。これは国というより国民の学力や生活の知恵、すなわちその国に住む人のもの考え方や知能を評価しているため違和感なく用いられたのだと考えている。

次に「頭がいい」が動物を対象としにくい理由について考察する。この理由については、基本的にものを考えたり知能があったりする生き物の中心は人であることが要因であると考えられる。人以外の動物はそれに当てはまらないため、基本的に用いられにくいのではないだろうか。

とはいえ動物の中でも一定数「頭がいい」が使われている事例はあり、そのほとんどが犬や狼、カラスなどである。

哺乳類や鳥類の中でも、これらは度々動物番組等で知性的な習性があるとして取り上げられている。おそらくそういった面を「頭がいい」と評しているのだと考えられる。また犬などはペットとして一般的で、生活を共にする中で何か意図があると思われる行動をする姿を見たとき、飼い主達は「この子は頭がいい」と思うのかも知れない。

ただ、昨今「植物の痛覚の有無」などが研究されていることを鑑みると、この先動物や植物等の研究が進んでその知性などが明確になるにつれて「頭がいい」や「賢い」がそれらに使われることも多くなるのかも知れない。

7. 結論

ここまで「頭がいい」と「賢い」を互換性と対象の視点から比較し、その違いについて探ってきた。

結論としては下記の通り。

・「頭がいい」はもの考え方や知能に対する評価を表す言葉であり、人に使うことが非常に多い言葉である。
・「賢い」はそれ自体が優れているというものの性質、性格を表す言葉であり、人を主としつつも動物や方法、行動など汎用的に遣うことのできる言葉である。

今回は辞書記述の比較に始まり、実際の語例や文の収集、それらを使って互換性と対象の2つの視点から見た上で類似的な結果が出た。ここで得られた考察の蓋然性を高めていくことが今後の課題である。

注

- 1) 人、動物以外の国、選択、行動などを今回は「その他」として分類したもの。
- 2) コーパスによって収集した文毎に、前後の文脈や結び付いている単語から修飾する対象を判断した。得られた文から明確に対象が判断できないものは「分類不可」とした。
- 3) 「頭がいい」が単体で出現しており、文中の語例でなかったため除外した。
- 4) 検索の関係上、古語の「賢い」が混じる場合があったが、現代語と異なる用法があり得ることを考えて除外した。

引用・参考文献

- 1) 小学館『日本国語大辞典第二版』
- 2) 川崎加奈子 (2011) 「類義語のコロケーション比較一例～永遠と永久～」『長崎大学留学生センター紀要』第19号 pp.75-83.
- 3) 水上由美 (2014) 「『実践日本語教育スタンダード』を利用した類義語リスト (形容詞編) の作成」『実践國文學』第85号 pp.1-20.

(2023年3月1日 受理)